

草津市立矢倉小学校通信 平成30年9月28日 NO.10



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

ものごとのよしあしをぶれずに示し続けて

教室を巡っていて、よく見かける光景……。丸つけをする先生の横で、子どもは赤ペンの動き、一つ一つをじっとみつめている。出された問題は簡単で、自分が解いた答えに自信があり、調子よく丸がついていくうちはゆったりくつろいでいられる。余裕の雰囲気も漂わせることもできる。が、ひとたびペンが止まると、緊張した面持ちとなり、次の展開を待ち受ける。

こんな場面を見かけるたびに決まって思い出すことがある。私が子どもだったころの思い出。私の担任は、何かよくないことがあると、誰がそばにしようとお構いなしに「ダメじゃないか」と厳しい口調で咎めたり、ことばにしないまでも気持ちを表情に出したりするような、わかりやすいタイプの人物だった。だから、何がよくて、何がよくないことか、分別のつかないうちは、いつなんどき叱られるかわからず、みんなドキドキした。そんな面持ちで、漢字や計算の練習ノート、テスト直しのプリントをみてもらっていた。不意を突かれ、叱られることほど理不尽なことではなく、ダメージも大きい。叱られるときはそれなりの心構えが必要なことから、せめて前置きのようなものを用意しておくべきではないかと、今ならそう伝えたいところだ。びたりと止まった赤ペンをバロメーターに、次の展開を待つ緊張感も相当なものとなる。ところが、そんな担任も、先生として期待していたとおりのよいふるまいを私たちが行い、問うたことに正しく答えることができれば、実に機嫌良く笑顔でいてくれた。作文は、その場面の瞬間を捉え、こまかに綴る中で、心の内がよく伝わるように正直に語る書きぶりをする、それだけでよかった。先生が読みながら、ふむふむとゆっくりうなずく様子を見ているだけで、こちらは照れくさくもなった。

よいことは褒められ、よくないことは怒られる。正しいと自信をもって取り組んだときは、少しは褒めてもらいたい。子どもでなくても、大人でも、たいていそんな心持ちではないだろうか。ものごとのよしあし、喜ぶべきことはどのようなことか、わかりやすいものさしを、ぶれずに示し続け、ふるまい続けたい。

校長 大林 道範